

# 「西蔵班(校)」..

## 転地エリート教育を受けるチベットの若者たち

——「ポストコロニアル」という観点と現代ラサ——

村上大輔



### はじめに

筆者は『中国21』誌上で「ラサにおける民族内格差とチベット人アイデンティティの行方」と題する拙論〔2009〕を発表したが、そこではチベット自治区内において広がる経済格差や社会矛盾について、様々な角度から論じ、チベット人の民族アイデンティティの抱える問題や矛盾を指摘した。本稿はその議論をさらに展開するものである。中国内地で遂行されるエリート教育システムである「西蔵班(校)」に焦点を当て、それに参画するチベット人たちの社

会的・政治的生態についての紹介と分析を試みる。

四半世紀もの歴史をもつ西蔵班(校)制度であるが、これまで約三万五千人もの優秀なチベット人の若者たちが参入し、その過半数は帰郷して、自治区政府の幹部や、観光業など主要産業の優秀な人材として活躍している。彼らは、いわば、中央政府によって養成、開発された人材で、チベット地域の安定と発展には欠かせない集団と見なされている。それ故、西蔵班(校)制度はチベット人の「漢化」に繋がるとの見方もよくされるが、後述するように、これは外側からの一方的な意見、偏見である場合が少なくない。その内実、西蔵班(校)出身者の体験の中身は、極めて複雑

かつアンビバレントなもので、彼らに接近して理解するためには非常にデリケートなアプローチが必要になってくる。本稿では、「ポストコロナリアル」(ポストコロナリズム)と呼ばれる学問領域が提示してきた理論的枠組みを援用しながら、西藏班(校)出身者の政治性や民族アイデンティティにさらに切り込んでいきたい。

以下、次のように進めていく。まず、西藏班(校)の背景と概略について述べる。そして、この制度のチベット人をめぐる様々な見解について紹介と分析を行い、それらの問題点を指摘する。続く節では、西藏班(校)出身者の内地体験、社会的動態について、民族誌的紹介を試みる。多くの「生の声」を取り入れることにより、「民族間空間」に生きるチベット人の内的葛藤に、断片的ながら触れることができれと思う。最後に、「ポストコロナリアル」という理論的パースペクティヴを紹介し、西藏班(校)のチベット人の民族アイデンティティについて論じる上で、ある有効な視座を提示したい。

本論に入る前に、補助線を引いておく。文化人類学者 Steven Harrell [1995] は、グラムシのヘゲモニー(覇権)に関する考えから示唆を受け、中国の「文明化」プロジェクトのエージェントとなる少数民族のエリートを *compradore elites* と呼んだ。*compradore* とは、ポルトガル語で「バイヤー」とか「ブローカー」の意味で、元は外国企業のため

に働く中国人の仲介人を指す。中国の現代化のプロジェクトに共謀 (*complicity*) し積極的に参画する周縁の少数民族をこのように定義付けることにより、政治権力とローカルの利害や価値の狭間にたつ彼らエリートが体験する、力のせめぎ合いを抽出しようとしたのである。本稿で紹介する西藏班(校)出身者の社会的位相は、この *compradore elites* のそれに極めて近い。

## 一 背景と概略

中国・チベット<sup>3</sup>の改革開放後間もない一九八四年――。党中央および國務院は、「智力援蔵」のスローガンの下、中国内地にチベットの青少年を「留学」させ、大量の人材育成を図る一大政策を発表した。その背景には、チベットにおける有能な人材の欠乏に対する、中央政府の切迫した危機感があった。チベットの安定と発展のため、高等専門教育を内地で受けさせ、政治思想上においても信頼のおける幹部や人材の大量生産が必要不可欠だったのである。<sup>4</sup>早速一九八五年には、約一三〇〇名ものチベットの子供たちが選抜され、北京や上海などに創設された全国一六か所の教育施設でのエリート養成が始まった。<sup>5</sup>爾来二五年、「より洗練された」、「より文明的な」教育を享受させるため、選抜・輸送されたチベットの子供たちは約三万四

八〇〇人を数える。うち二万人以上がチベットに戻り、政府機関や都市部の主要産業界で就労している<sup>⑥</sup>。

西藏班(校)に参加する子供たちは、原則として自治区内の小学校卒業生で、ほとんどはチベット族である<sup>⑦</sup>。卒業前に行われる選抜試験には、数学、中国語、チベット語などの学科試験の他、健康診断や「思想品德」も評価項目として含まれる。選抜生徒数は毎年約一五〇〇人で、そのうち七割以上が農牧民出身と言われている[郭2008:100]。自治区内農牧民人口が全体の約八五%前後であることを考慮すると、<sup>⑧</sup>広範な地域からほぼ「公平」に選抜していると言えよう。また、授業料や寮費などの必要経費に関しては、原則として中央政府や自治区政府、受け入れ省が負担することになっているが、ここ十年ほどはチベットの経済発展を反映して、費用の一部は家族が負担するようになってきている。

故郷から遠く離れて勉強する西藏班(校)の子供たちは、最初の一年間、徹底的に中国語の読み書きを鍛えられる。その後の三年間の中学生活では、同じ学校で勉強する漢民族の子供たちと同様に数学や歴史、政治などを、漢民族教師によって中国語で書かれた教科書を用いて学習する。この四年の間は教育上の効果をねらってか、チベットに帰省することは許されていない。無事「初中」(中学)を修了した学生は、「高中」(高校)もしくは「中専」(中等職業

専門学校)へ進むが、その間も引き続きチベットに戻ってはならない規則となっている。後述するように、十代の多感な時期に漢民族の習慣や考え方に親しみ、チベットの文化や言語、特に仏教の習慣から隔絶された代償は相当なもので、帰郷後、チベットに再適応する際の深刻な障害となっている。この文化的屈折は、中国人研究者も柔らかな表現ながら指摘するところとなっているが(例えば、郭[2008]、Zhu [2007]など)、それは本稿の主題であるポストコロニアル体験の源泉のひとつとなっている。

さて、七年間の西藏班(校)生活を終えた後であるが、優秀な者は内地の大学やラサの西藏大学などに進学する。帰郷後においては、卓越した中国語の運用能力とともに、質の高い高等教育、職業訓練のため、その経済的安泰や社会的地位はほぼ約束されている。自治区政府の官僚、高等教育の教員、中小の企業家、技師などになり、チベット・ラサの上中流階層の中核を形成するようになる。そのため、西藏班(校)への転地留学は成功への近道として見られることが多く、ラサでは西藏班(校)ブームが起きている。教育熱心なチベット人の親が増え、ラサの小学生の多くは学校間の競争もあり、遊ぶ暇もないほどの長時間学習を強いられている。

両親や親族の期待を背負って内地に送られるこれら優秀な子供たちは、地元政府や中央政府の期待を一身に背負う

エリート候補生となる。繰り返すが、彼らはその受けた教育と能力のために、帰郷後、チベットの経済発展と体制の安定のために貢献することを要請されていくようになるのである。西蔵班(校)制度は、中国のチベット地域における統治を円滑に進めるための、いわば「コロニアル・エージェント」養成の側面が強い。中央政府が掲げる社会主義現代化をチベット地域に実現すべく、地元の優秀な人材をその「文明化」プロジェクトの仲介人として、国家自らが育てあげるプログラムなのである。

## 二 西蔵班(校)をめぐる様々な見解

次に、西蔵班(校)制度やそれに参加するチベット人たちに関する、研究者たちの様々な見解を見ていきたい。その多様性には、極めて注目すべきものがある。

まずは、西蔵班(校)制度を否定的・批判的に捉えようとする立場であるが、これは一般的傾向として、欧米の研究者の間でよく主張されている。例えば、アメリカ在住の中国人教育学者 Wang と Zhou は、転地教育である西蔵班は、チベット文化を反映させたような教育プログラムではないため、チベット人としてのアイデンティティの育成を意図的に妨害するものとなっていると批判する [Wang and Zhou 2003]。また、チベット政策アナリストの Lafitte

は、より強い調子で、西蔵班(校)制度は中国の「同化」政策以外のなものでもなく、チベット人にとって「現代性」(modernity)とは、人格的統合の多大な犠牲なしには享受できるものではない、と糾弾する [Lafitte 2003]。さらに、十年ほどにわたって比較的客観的な立場からチベット関連の情報を流していた T I N (Tibet Information Network) であるが、基本的には上記と似たような立場である。そのある記事では、西蔵班(校)制度の目的は「漢化」で、「子供たちは自分たちの文化に本質的に無知となり、自分たちの民族性や民族の利益などに対して感覚を全く失ってしまっている」と、非常に否定的な見方を示していた [TIN 1999: 11]。アムネスティで働く知人は、西蔵班(校)の出身者たちに関心を示していた筆者に対し、「彼らは中国のスパイだから気をつけるように」と忠告したが、非常に困惑したのを覚えている。

これらの批判的立場は、ある部分では首肯できるものもある。中国語や漢民族の習慣に親しみ、チベットのそれに疎くなるという意味での「漢化」はまさにその通りと言わざるを得ない。しかしながら、Lafitte の言うようなチベット人は現代性 (modernity) を享受することは難しいなどとする、やや差別的ともとれるコメントや、西蔵班(校)出身者をスパイだと決めつけるような一方的な見方は、到底受け入れることはできない。そして、Wang と Zhou や

TINが指摘するように、チベット人としてのアイデンティティはそう簡単に剥奪されたり、消失したりするものであろうか。

次に、中国国内の研究者たちの見解を見てみたい。これは、ある意味想定内とも言えるが、論点を際立たせるために紹介する。ラサの師範高等専科學校の教師である郭龍岩は、地元ラサの西藏社会科学院が発行する學術機関誌『西藏研究』に、西藏班(校)出身者のアンケート調査を基にした統計分析結果を発表した〔郭2008〕。調査は二〇〇四年に行い、対象者は、ラサやシガツェなどの政府機関で働く官僚、教師、医者、技師などチベット族を主体とする一六〇名である。内地滞在時における同胞のチベット族や漢民族との交流状況、帰郷後のチベット文化との距離感などを、項目別に示した後、その結論として、「……党の民族教育政策の享受者である彼らは、チベットの政治安定を維持し、民族団結のための中堅の力となっている……また、漢民族との頻繁な交流や広い見聞などにより、祖国の歴史と文化を比較的深く理解しており、……彼らには極めて強い愛国の情熱が普遍的に備わっている……」〔郭2008:110〕、といった調子で、地元メディアで常用される美辭麗句を並べている。

一方、Zhu Zhiyong (北京師範大学) は、理論的で綿密なフィールド調査研究をもとに、西藏班(校)のチベット人

生徒の民族アイデンティティ構築について、一冊の英語の著作にまとめている〔Zhu 2007〕。Zhuは、江蘇省の常州市にある西藏校の生徒たちに注目し、彼らの民族アイデンティティが、西藏班(校)プログラムの現場、そして漢民族地域というコミュニティの中で、いかに構築されているかを描こうとしている。さすが、学校という現場をフィールド調査しただけあり、西藏班(校)制度の矛盾や問題(例えば、漢民族教師とチベット族生徒間にある民族間の矛盾、チベット文化に関するカリキュラムの欠如など)に多少は触れているものの、その内容は報告書のレベルに留まっている。西藏班(校)の「矛盾」とはいったい本質的にどういったものなのか、それはどこから生じるのか、参加する生徒たちは一体どのような社会的・政治的存在か、西藏班(校)制度そのものの政治的含蓄に対するクリティカルな吟味が希薄である。Zhuの基本的な主張は、西藏班(校)で勉強するチベット人生徒たちの民族アイデンティティは保持されており、それは、国家と学校教育による「割り当て」(assigned)と生徒自らの「主張」(asserted)の二つのファクターが深く影響しているという、現状報告に終始している。西藏班(校)の政治性や生徒たちの中にある内的葛藤については正面から捉えられていないため、西藏班(校)のチベット人アイデンティティを理解する上で紋切り型の説明をするのみで、新しい概念や視点は何も提示されていない

い。現状の体制の価値を積極的に容認する姿勢が、見え隠れするのである。ただ、著者を弁護すると、このような重要な論点を欠いているのは、学校生活のコンテキストにのみ注目し、チベットに帰郷後の生徒たちについて詳しく追っていないことが大きな一因であるように思える。

最後に紹介したい西蔵班(校)に関する見解は、ラディカルなものである。この見解は、特に西蔵班(校)を周到に研究した結果得られたという類のものではなく、研究者自身の洞察と嗅覚、そして彼らの政治的ポジションから生まれた観点とによってよいであろう。現代チベット学者で自らが亡命チベット人である Tsering Shakya (ブリティッシュ・コロンビア大学「カナダ」)は、二〇〇八年チベットで起きた抗議行動・暴動後のインタビューのなかで、西蔵班(校)のチベット人に関して次のように述べている。「西蔵班(校)の卒業生たちは、ずっとよりナシヨナリストイックになる。ブログやウェブなどで彼らは、自身の文化アイデンティティや言語を剥奪されたことに対して、中国政府に対する不満を述べる先頭者となることが多い」[Shakya 2008: 14]。冷静で客観的な現状分析で知られる Tsering Shakya であるが、その見解は短いながらも注目に値する。また、チベット人作家オーセルを妻に持つ漢民族作家王力雄は、チベット問題に関するその論説の中で、元自治区書記の陳奎元(在任一九九二—二〇〇〇)の言葉(一九九六

年)を紹介する。「何人の裏切り者が我々によって育成されたことか。……ここにきて(民族的)敵意の感情は幹部や知識人、役人の間に潜在している……」。そして王は、西蔵班(校)出身者は、「最も強い(チベットの)ナシヨナリズム的感情を有する、最もラディカルな反体制派となる」と主張する [Wang 2002: 109]。

これは一体どういうことであろうか。先に見たように、西蔵班(校)の生徒たちは「漢化」され、中国政府に忠実なチベット族、政治思想的にも信頼のおける人材に育成されているはずではなかったのか。おそらく Tsering Shakya や王力雄の選ぶ言葉は、やや誇張気味かもしれない。だが、剥奪されたが故に、逆にそれを希求する強い欲望が生まれるということはある。社会学者 Zygmunt Bauman が、アイデンティティに関するその理論的考察 [Bauman 1996: 18] の中で鋭く語るように、「アイデンティティとは「問題になる」というような類のものではなく、問題を孕んで——いわば「問題として」もしくは「我々が取り組まなければならぬタスクとして」——生まれるものであり、引き抜かれたという種の現実感の中でしか明確になり得ないようなものである。上の二人のラディカルな主張は、チベット人をその文化的土壌から引き抜く西蔵班(校)制度は、「チベット人意識」を逆に深めるように作用する、ということである。

本稿で筆者が立脚する立場は、この観点に強く共感する一方、先に示した上の二つの視点も簡単に切り捨てることはできないのではないか、というものである。西蔵班(校)の生徒たちや出身者たちに関する言説の多くは、彼らにチベット人としてのアイデンティティが「あるかないか」、「強まるか弱まるか」の二項対立的な議論になりやすい。「ある」と同時に「ない」、「弱い」からこそ「強い」といった、アイデンティティ特有の両義性・非合理性をも織り込んだ認識が決定的に欠けている。

上に紹介した見解の多様性、解釈の揺れは、それぞれの研究者が立脚する政治的立場によるところが大きいと思われる。しかしながら、もうひとつの理由として考えられるのが、彼ら「特殊なチベット人たちが占める政治的位置性である。彼らは、体制にとってみれば、信頼できる有能な「人民」であり親しい存在のはずである。それと同時に、彼らはチベット族という文化も宗教も政治思想も異にすることの少なくない「他者」である。また逆の方向から見れば、生粋の「チベット人」であるはずなのに「体制側に加担」している。外部の人間にとっては、親密感を感じるとともに、不気味さを醸し出す「官製チベット人」であるため、やや情緒的に、一部分を取り出して一方的に否認したり、積極的に認識・称揚したりしてしまうのではないか。

結論を先取りすると、西蔵班(校)を体験するチベット人たちは、ラディカルなチベット・ナショナリストになるわけでもなく、中国への祖国意識が堅固に育まれるわけではない。また同時に、チベット人としてのアイデンティティが希薄になるというわけでもない。育まれるのは、視野の広さと豊富な知識に裏付けられた独特の現実感覚、「民間空間」に生かされることによって研ぎ澄ましてきたフランス感覚である。国家の利益の外装を纏いながら、その内的体験にはそれを裏切るものがある。また、チベット人としての誇りや自覚が強い一方、非常に合理的な思考をもつて変化や抑圧に順応する。ここに彼らのポストコロニアル性が際立つ。西蔵班(校)出身者たちの民族アイデンティティは、チベットの伝統的価値と、当局が推進する現代化・文明化のイデオロギーの間を複雑に交錯させるものとなっているのである。

いよいよ次節では、西蔵班(校)出身者の内地体験、社会的生態を民族誌的に紹介していくことにする。

### 三 西蔵班(校)を経験するチベット人たち

ここで紹介する西蔵班(校)の出身者たちの言は、二〇〇〇〜〇二年、筆者がラサに滞在していた時に交際のあった西蔵班(校)経験者約六〇名によるものである。彼らのほと

んどは九〇年代に内地に七年間以上滞在している。彼らの個性や家族のバックグラウンドは多種多様であるが、西藏班(校)での体験の質や帰郷後の言動には極めて顕著な特徴が見いだされた。本節ではそれらを抜粋的に報告する<sup>12)</sup>。漢民族とチベット族の文化価値の間で揺れる、彼らの心情に注目してほしい。

まず、彼らの語る内地体験全般に関してであるが、概してポジティブなものが多い。チベットと比べて教育環境が格段に優れ、特に、教わった漢民族教員の「文明」度や「文化程度」(学歴・教養)の高さを指摘する。よく引き合いに出されるのが彼らの教育手段と姿勢である。ある女性の若者は言う。

チベットでは、学則を破ったらその罰はとても厳しいです。プチュンという名の先生のことを私はよく覚えています。先生は、宿題を忘れたら私たちを殴ります。時に昼食抜きにさせられます。悪いときには、先生はその学生たちを裸足のまま氷の上に立たせます。冬には、六人の男の子を河で泳がせたこともあります。宿題をしなかったからです。私はチベット語を教えてくれたプチュン先生に感謝しています。でも、先生の教え方はとても古すぎます……中国内地では、宿題を忘れたり、学則を破ったとき、先生は決して生

徒を殴りません。先生はただ私たち生徒に反省文を書かすのです。決して殴りません。これだけでも、中国の教育が「チベットに比べて」洗練された、より文明的なものであるかが分かります。

チベット族教師は体罰を用いて生徒を脅しながら教育するが、漢民族教師はそんな「素質」のないことは一切せず、常に道理を用いて教え諭す、という。

チベット族ではなく豊かな教養に恵まれた質の高い漢民族教師から教わったプライドはかなり大きく、後々彼らのエリート意識を形成する上で少なからず作用する。また、親元を離れているため、いわば「親代わり」のようになった漢民族教師に対する親しみや感謝の情も並々ならぬものがあり、耳にすることが多かった。

一方、同じ校舎に通学する漢民族の同級生とは採め事が絶えず、特に男子生徒の間ではほぼ日常の一部となっていたようである。この点は控え目な表現ながら、上に紹介した中国人研究者郭も報告している [2008: 105]。大抵の場合、民族的な差別が起因となる、とインフォーマントたちは口をそろえて言う。少数民族であるチベット人に対する優越感の表れからか、漢民族の生徒たちは、「落伍している」「野蛮である」「汚い」などといった視線や言葉を投げかけてくることが多いという。学内で少数派であるチ



ベトナムの子供たちはよく団結し、そのような差別的な態度には断固として力に対抗する場合も少なくないらしい。

西蔵班(校)のチベット人に対する軽蔑の眼差しは、生徒だけでなく大人の漢民族からも投げかけられる。「不衛生で貧乏なチベット」「社会が立ち遅れたチベット」などと、言われることも少なくないという。こういった外側からの無遠慮な評価が、西蔵班(校)の子供たちにある種の反骨精神を育てるよう作用するのは稀ではない。「漢民族たちを見返すように」との気持ちで勉学に励み、結果として西蔵班学級は学内でも優秀であるとの評価を受けるようになることは少なくないようである。

漢民族に囲まれた環境の中で、「自分たちがチベット族であること」「伝統的な民族の習慣を引きずっていること」などを、強く意識する機会が非常に多いのである。そして、親族など心から頼れる大人のチベット人が近くにおらず、同郷の同級生だけであるという外的条件が、強力な連帯意識が生まれる土壌となる。内地教育でチベットの習慣や言語に疎くなつていく一方、ある意味客観的に自分たちの民族性を捉えはじめ、自負やプライドが育つていく。中国内地に長期滞在するということは、いわば国内にいながらの一種の異文化体験とでも言うべきものであり、自分たちの社会や伝統に対して劣等感や葛藤を感じながらも、それらに自負を抱き、失うまいとする態度や心構えのよう

なものが熟成されていくようになるのである。社会的に西蔵班(校)の学生たちは弱い存在に立たされるため、民族としての自尊心を半ば意識的に強めあうようになるが、これは想像に難くない。

そして帰郷後であるが、彼らは別種の「異文化体験」に曝されることになる。長期間にわたる中国内地での西蔵班(校)体験のため、自身の「チベット人らしさ」の欠如に対してコンプレックスを抱くと同時に、地元人に対する苛立ちや文化的距離を強く覚えるようになるのである。次にみるインフォーマントたちが筆者に語った様々なコメントは、その内の葛藤の吐露である。

私は内地に七年も住んでいたもので、ずっとチベットに住んでいる人と私を比べると、考え方、衣服、食べ物などに違いが見られます。私はチベット族です。でも、チベットの歴史も知りませんし、チベットの食べ物、特にツアンパ<sup>14)</sup>は好きでなく、食べると腹痛を起します。内地にいるとき、魚などチベット族が普段食べないものを食べていたからです。……私は七年間の間、いろんなことを学びました。でも、久しぶりに故郷に戻ったとき、私の親戚や友達は私を見て「なんだかチベット人には見えない」と言いました。私は悲しくなり、このことで悩むこともありました。でも確か

に、チベット語を話すことができる能力以外は、チベット族としての特徴は私にはあまりなくなつてしまつたのです。

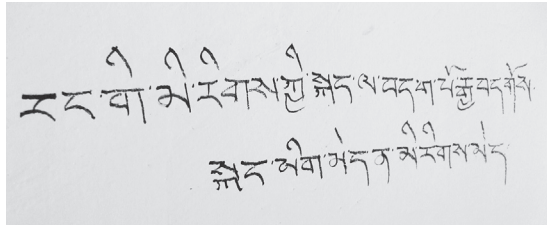
また、別の男性はこう言う。

僕は、自分が本当にチベット族であるかどうか、なんて考えると、いつも恥ずかしくなります。なぜなら、表面だけを見る限り、僕は六〇％は漢民族の習慣で占められて、残りの四〇％ぐらいしかチベット族じゃないからです。周りの人は、僕がチベット語の読み書きができないのを知ると、とても驚きます。でも、確かにそうですね！もし自分の民族の言語の読み書きができないのなら、それはとっても滑稽で奇妙なことだと思います。

このようなコメントは、西藏班(班)出身者、特に帰郷して間もない若者たちの間で、最も典型的なものである。内地では強いチベット人意識を植え付けられる一方で、故郷では、お前はチベット人に見えない、チベット人なのにチベット語ができないとはどういうことか、などと責められるのである。自身のアイデンティティに敏感な若者たちにとって、これはたまつたものではない。

また次のようなコメントは、チベットらしい宗教風土を感じさせる。このコメントを語つたインフォーマント(女性)の両親は信心深く、もし彼女が西藏班(校)の選抜試験に不合格となつたら、地元の僧院で彼女を尼僧にするつもりでいたようである。

子供のとき、私は両親から影響を受け、神仏にお供え



ラサの有名観光地の男子公衆便所にあった落書き  
(2007年8月筆者撮影)

*rang gi mi rigs kyi skad la bdag po rgyab dgos  
skad yig med na mi rigs med\**

自身の民族の言語に対して、配慮しよう。  
言語が無ければ、民族も無い。

\*落書きの文句のチベット語を Wylie(ワイリー)表記したものを。

をする、生き物を殺さない、などの仏教の習慣に親しんでいました。仏像の前でお祈りをするのが好きだったのです。……しかし、内地からチベットに帰ってきて、両親と私の間で意見が異なることが出てきました。例えば、両親は「来世のためにお布施をするのは大切だ、前世のお陰で私たちは今はこのように幸せなんだ」と言います。でも、私はちよつと違います。また時に両親は、「今あんたが持っているものすべては、因業によって決められたものだ」と言います。私はこのような古い考え方にはちよつとついていけません。私は私の運命や人生はある程度自分で作ることができると思っています。私のような西藏班(校)だった学生は特別で……。

伝統的な習慣や考え方からも疎外されてしまった彼らは、地元のチベット人からは「チベット人らしさのないチベット人、プライドを捨てた、偽のチベット人」などと、見られてしまう。そして当然のごとく彼らは、「喪失」に對するコンプレックスを積み重ねていくが、彼らは彼らで、内地経験に由来する優越感から、親族を含めた地元チベット人のことを、「迷信的」「直情的」「怠惰」などと見下すことも少なくない。

ずっとチベットに住んでいたチベット族は保守的です。彼らと私たちには大きな違いがあります。それは、社会主義や文明化の考え方に對する真剣さ、そしてその知識において。私たち(の考え)はより解放されていますが、彼らの中には迷信を信じている人もまだいます。例えば、病気になったときに病院に行くよりも神仏に祈ったりしています。……また、チベット族は怠惰でピクニックが大好きです。経済的に豊かになるよりも人生を楽しむほうを選ぶからです。チベットはチベット族だけでは発展しないでしょう。私たちのような、中国内地で文明的な知識を身につけたチベット族が活躍しなければ。

地元チベット族の学生などの若者たちは、思想的な「素質」が私たちと随分異なります。彼らは粗雑で暴力をよく振ります。中国内地では、異民族間の友好はとても重要だとよく言われています。私も内地にいるときには、漢民族など他の民族の人たちからよくしてもらいました。ところが、このチベット族たちは自分たち民族同士でよく喧嘩をします。私も一度巻き込まれたことがあります……。

内地の習慣と文化を吸収してきた西藏班(校)の若者たち

は、考え方や態度などが洗練されていることが多く、若者特有の自信にも溢れている。話し言葉も、中国語とチベット語から成るハイブリッドな表現法<sup>16</sup>を多用し、いわば「帰国子女」風の体で、地元チベット人の前に現われる。その斬新さや教育レベル、将来の有望性などのため、同世代の羨望の眼差しを一身に受けるのである。しかしながら、自身の「民族的喪失」に対して、伝統的な価値を重んずる地元チベット人たちは言うまでもなく、自分自身も否定的な見方をする人が多い。受けてきた特殊な教育環境のため、チベット人としての民族意識が人一倍強くなっているものの、その中身、特にチベット語の能力など文化的資質には明証できるものが見当たらない、という存在矛盾を抱えることになるのである。この点が、内地体験組の優越感が、簡単に劣等感に反転してしまう梃子となる。中国内地での経験に対するプライドとその裏返しである喪失感、そして帰郷後に強まるチベット族の「非文明性」への蔑みと民族的自尊心の間を、常に行ったり来たりするようになる。まるで振り子のように「漢民族的な価値」と「チベットの価値」の両方に対して、帰還しては距離を置き、引いては戻る、といった具合である。筆者は、これらのチベット人の若者たちと交際する中で、こういったアンビバレントで両価的な彼らの民族感情を間近で観察してきたが、興味深いことに、そういった矛盾や葛藤が、自身のア

イデンティティの糧となる例は少なくないのである [Murkami 2006]。地元チベット人との精神的な距離を感じつつも、強い喪失感のために故郷の文化的土壌に再び帰還したいという内的葛藤の中、「チベット人らしさ」をなんとしても取り戻そうとする強い志向や欲望が表面に出てくるようになる。先に見た Tseung Shakra や王力雄の指摘する西蔵班(校)出身者たちの「強い民族感情」とは、このことを指すと思われる。

例えば、西蔵班(校)出身者たちの中には、その高い教育と身につけた外国語の能力から、通訳ガイドになる者がいる。彼らの多くは、自身の民族的な「中身」が欠けているために、最初のうちはチベットの文化や習慣を解説するという責務の中で葛藤に苛まれることになる。しかしながら、仕事をする中で、自民族の伝統文化の価値を再発見・再獲得し、「チベット人らしさ」を自分たちなりに回復しはじめるのである [ibid. 2006]。いわば民族文化のブローカーという仲介的なポジションを通して、自民族の様々な伝統や価値観と深く接するようになり、その経験が彼らの中に蓄積した内的葛藤を解消させる働きをする。観光産業という現代化の流儀の中で、民族アイデンティティを再構築できる機会が与えられているのである。

チベット人ガイドに関しては、さらに指摘しておくべき点がある。彼らは、より高い次元でもう一つ媒介的な役割

を担わされているのである。それは本稿の冒頭で触れた *compradore elites* 的な役割である。それは、政治権力とローカルの利害の狭間に立ち、その両側の極の価値を拒否すると同時に、受容する政治姿勢であった。チベットの現状や歴史を外国人に宣伝するという、いわば国家的な任務を背負わされると同時に、その仕事の性質上、チベットの仏教文化の土壌にもしつかり身を置くことになる。チベット人ガイドの仕事は、西藏班(校)の出身者たちが背負ってきているイデオロギーの極——漢民族的／チベットの、国家／地方、現代的／伝統的、文明的／仏教的、といった二項対立——をさらに緊張させると同時に、共存並立させるような性質を持っている [Ibid. 2006]。これら二極の矛盾やジレンマそのものを引き受けることによって、相容れない価値の間を振幅運動し、その運動そのものに自分たちの「民族間」的な意義を見いだそうとしているかのようである。

一方で祖国の統一や発展を促進する「文明化の使者」としてのフォルムを身に纏いながらも、チベット族同胞の代弁者のような形で、民族の誇りや伝統的価値を体現していく立場となる。「漢民族的な価値」、「チベットの価値」といった、どちらかの極に偏るのではなく、かといって両者の和解的折衷というのでもなく、自らその緊張を孕んだ「間そのもの」という民族動態的な運動の中に生きるのがある。

チベット人ガイドに関する詳細な民族誌的記述は拙論 [2006] に譲るとして、ここでは別の角度から理解を深めるために、チベット人現代画家ゴンカル・ギャツォの例を紹介する [Harris 1999]。西藏班(校)出身者たちの、剥奪された民族性を回復させようとする姿勢が、隠喩的・存在論的なレベルで、この画家の創出したスタイルと非常に類似しているのである。文革中にラサに生まれ育った彼は、北京へ赴き現代絵画を勉強する。数年後に帰郷するが、西藏班(校)の学生と同じように、チベットの文化環境に対して疎外感を強く感じるようになる。その時に再発見したのが、チベットの伝統的な仏画(タンカ)であった。八〇年代に、ゴンカルは同僚たちと共にモダニズムの手法を発達させ、それによって、喪失し彷徨う民族のアイデンティティを表象しようとした。それは、仏画を描く際に初めに薄く引かれる補助線を異様に際立たせて残し、神仏のイメージをぼかしたままにするという手法である。細かい仏教的なディテールは容赦なく剥ぎ落とされ、その配置やパランス、大きさなどを定める下書きの線を強調させるといふ、伝統的な手法を用いるのと同時に否定するような「モダン・タンカ」であった。インドのドラムサラへ亡命後、彼のスタイルは伝統主義を掲げる現役のタンカ絵師たちに徹底的に非難されることになる。しかし Harris が指摘するように、ゴンカルにとっては、仏教の具体的な図像の

ディテールよりも、その配置を決定する線の群れ、そのバランスこそが、チベットの伝統絵画の原則を体現する上で、哲学的・本源的ともいえる意味合いがあった。<sup>10)</sup>この感覚は、民族文化のインサイダーであると同時にアウトサイダーでもあったという彼の両義的な社会的立場から生まれたものであった。「中身」の具体性よりも「フォルム」の普遍性・抽象性を好む彼のスタイルは、彼の世界において自身の「チベット人らしさ」を復権させる、奮闘の結果であったのである。

#### 四 「ポストコロニアル」という 理論的視座の可能性

本節ではまず、「ポストコロニアル」と呼ばれる学問領域から本稿と関係のある議論を紹介する。そして、西蔵班(校)出身者たちの民族アイデンティティを捉える上で、その理論の有効性について考えてみる。

「ポストコロニアル」(ポストコロニアリズム)とは、抑圧的な政治空間の中に生きる主体や、その体験そのものへ焦点を当てる一種の批判的思考、もしくは政治姿勢である。外部からは見えにくい被支配者の主体の本質へ近接するための繊細な枠組み、または筋道と言える。ポストコロニアルのアプローチにおいて最も意義深いものは、支配者

と被支配者の両極性を前提とするような反コロニアリズムのイデオロギー(例えば、「チベット亡命政府」が依ってたつような)と決別し、その両極の交差する場に投げ込まれた被支配者のリアルな生活や生き方へ焦点を当てることにある。そうすることにより、排他的な性質を帯びるナショナリズムを斥け、二項対立のフォルムを文化的翻訳のプロセスとして再解読するよう促すのである。支配者と被支配者の間にある二項対立的な強韌なヒエラルキーへの感性を保持しながら、ポストコロニアルと呼ばれる志向もしくは手法は、異質の文化コードや価値が、人々の実際的な必要性に応じて右に左に流れる「横断領域」を顕らかにすることにある。

被支配者の両義的なあり方、その肥沃な潜在性は、ポストコロニアリズムの批評家、Homi Bhabha [1994a]によって表現豊かに提示された。彼の主張によれば、支配的な文化に対峙する「ポストコロニアル体験」というのは、必ずしも単純な敵対関係である必要はなく、対立項に対して「非決定性」への積極的なコミットを通して自身の社会的権力を強化しうるのである。例えば Bhabha は Franz Fanon の代表著作のひとつ、*Black Skin, White Masks* [1986] に対して共感を示す一方で、「コロニアル意識」に囚われている彼の視点を指摘する。支配者である白色人種の「セルフ」と被支配者である黒色人種の「他者」の間で引き裂か

れた心理状態を、Fanonはヘーゲル的なヒューマニストの希望でもって弁証法的に止揚していこうとしていると、Bhabhaは批判するのである。その代わりに彼が提示するのは、「非弁証法的瞬間」[1994b:120]に立ち、戦略的に境界を横断したり、ずらしたりすることである。

ここで注意しなければならないことは、Bhabhaはポストモダンリズムが目論む「文化的器用仕事」(cultural bricolage)や複合的セルフ(multiple selves)を目指しているわけでもなければ、「多文化主義」や「文化相対主義」の言説に賛同しているわけでもない。これらの思想はそれぞれ違ったかたちで、被支配者たちの潜在力や彼らが対峙する挑戦を根こそぎ破壊するように作動するからである(例えば、現代中国が標榜する「多民族国家」というレトリックの政治性[毛里1998])。Bhabhaが我々に促すのは、抑圧的な政治空間の中で、互いに矛盾する価値を抱え込んで、それを陶冶するという解放的な行為である。それによって我々は支配者と被支配者の両極の価値によって構成される「間＝空間」(“in-between” space)へ入り、そこにおいて、これまで無視してきた自分を活性化し蘇えらせることができる、という。

アメリカ在住のインド人批評家 Gayatri Spivak [1990; 1996]もまた、やや異なった観点から、反コロニアリズムや伝統主義のイデオロギーを退ける。彼女は、被支配者た

ちの政治的存在性を引き上げるために、コロニアリズムのパワーと共に生きる道を指し示す。欧米のコロニアリズムが残した壊滅的な影響を認識しつつも、Spivakは enabling violence (権力を付与する暴力)や enabling violation (権力を付与する侵害) [Spivak 1990; 1996]といった、幾分逆説的な観念を提示し、抑圧的な政治権力の生産的な側面に注目する。これらの術語により彼女は、欧米のコロニアリズムを単純に拒絶するのではなく、生産的なネゴシエーションの場面に我々の注意を向けさせようとするのである。彼女の議論によれば、政治権力による様々な形の「暴力」というのは、人々を服従させることだけではなく、そのパワーのなかで生きていく能力をも授けるものなのである。

Spivakの提唱する enabling violence とは、抑圧の只中でさえ、いやむしろ(おそらくは精神分析的な意味での)「抑圧」があるからこそ、被支配者たちが積極的に主体的な社会政治的役割を担うことができる、という可能性を指し示すものである。

以上のようなポストコロニアルの批判的思考は、相容れない二極化の中で生きる西蔵班(校)出身者たちの民族アイデンティティを理解するのに、有効な手段になり得るように思われる。「漢化された」チベット人だと安易にラベルを貼られて誤解されがちな彼らに対して、より深く認識するための一助となる可能性が見えてくる。前節で見てきた

ように、彼らは、「現代」と「伝統」、「文明」と「仏教」といった、支配者側である「中国的」価値と被支配者側である「チベットの」価値の、二項対立の間で揺れている。リミナルな社会存在として、緊張を孕む二極の価値の中で、彼らにとって「意味あるもの」を取り入れると同時に拒絶し、民族的なジレンマの中に生きている。「文明化された」チベット人として、国家が紡ぐナショナルな言説の中に組み込まれながらも、民族意識を強靱に保持し、両者の相容れない価値の間で、いわば「存在論的な交通」を維持し実現しようとしているのである。西藏班(校)出身者たちは、民族的自負の強いチベット人として、コロナアルな現代的性を享受すると同時に拒絶する、アンビバレントな政治的位置——ポストコロナアルの位相——に置かれていると言えよう。

しかし、この議論にはいくつか問題点もある。ポストコロナアル批判というのは、元来、南アジアやアフリカなどの欧米の(旧)植民地空間に生きていた人々、もしくは、その抑圧的な空間を脱して欧米の大都市に移住する人々の、主体性や体験に関する問題を考える中で生まれた議論である。地政的なコンテキストが全く異なる場、特に中国のように、中央の支配に対する少数民族自身による批判的思考や実践が組織的に阻まれるような国家空間では、上に見たようなポストコロナアル理論の適用可能性は慎重に判

断すべきであろう。

そしてもう一点、強調しておくべきことがある。この「ポストコロナアル」というラベルは、「チベットの現状一般」を指し示すにはあまりにも無理があるということである。果たして「ポストコロナアル」と呼べないコンテキスト下の対象に対して、この理論は適用されるのであろうか。

こういった批判も考えられるが、ポストコロナアルという手法や理論は、西藏班(校)の出身者という限定的な集団に対しては、有効ではないかと思う。上で見たように、ポストコロナアルという視座は、異民族同士が接触し競合・共存する中で、被支配者たちが抱え込むことになる矛盾や内的葛藤を鋭く抉りだす上で、有効な切り口を与えるものなのである。我々外部の者にとっては、被支配者の生きている複雑な政治的リアリティを解する上で助けとなりうるものである。ここにかけてようやく理解できることであるが、先に見た、西藏班(校)出身者たちに対する多様な解釈は、「支配者側」もしくは(外側にいる)「被支配者側」のどちらか一方から眺めたものなのである。ここでは、民族間の境界に生きる人々は、一面的、一方的に表象されてしまう。また、解釈のその多様性に関して、西藏班(校)出身者たちの抱えるポストコロナアルの政治的位相の複雑さを、そのまま逆方面から照射しているとも言える。



ポストコロナ的 な生き方とは、抑圧や暴力に抗するのではなく、それらを積極的に享受し、自民族のアイデンティティの喪失を代償に権力側と和解することによって社会的・法的権力を獲得し、辛うじて誇りを保つ（＝完全なる破滅を防ぐ）術といつてよい。それは、抑圧的な政治空間を生き残ろうとする際の、ある種の「方便」であるともいえる。先に見た西蔵班（校）出身者たちの二極間の「揺れ」は、その政治的行為の足跡といつてもよく、現代ラサにおける政治的イデオロギー、そして「チベット人の民族性」という価値の、二つの軸が交錯する中で現われる主体性の証なのである。

## むすび

本稿の目的は二つあった。まず一つには、普段十分に表象されることの少ないチベット自治区内のチベット人の社会的・民族的生態を、断片的ながら記述・分析することであった。西蔵班（校）出身者たちの抱える矛盾や葛藤を描き出すことで、紋切り型に語られることの多い中国領に生きるチベット人が対峙する複雑な現実性に対して、少しでも理解を深めることができればとの筆者の願いがあった。中国政府がメディアで宣伝するチベット（人）、そしてチベット亡命政府やその支持者たちが表象するチベット（人）<sup>21</sup>

は、程度の差こそあれ、あまりにも現実離れしたイメージを提出し、お互いに排他的な境界を維持することによって単純で均一な物語空間が出来上がってしまった。そのため、実際に生きている人の姿や声がかき消されてしまっているのである。中国政府が少数民族に華やかな舞踊を披露させ「民族団結」を宣伝する一方、チベット亡命政府は、いかに中国当局により酷い文化虐殺・人権侵害が行使されてきたかを訴え、その結果、大多数の「市井の人々」の生活や生き様がそれらの濃い影に隠れて見えなくなってしまうている。このような中国・チベットに関する言説の支配性に対して、筆者は強い違和感を覚えていた。

もう一つの目的は、理論的なものであった。西蔵班（校）出身者たちの民族アイデンティティを語る上で、「ポストコロナル」という視座は果たして有効であるか、という問いを提出するものであった。先に触れたようにいくつかの問題を含む視座であるが、十分可能性のあるものだと確信している。また、現代化の影響を直に享受する都市部チベット人の民族アイデンティティ、そして中国のその他の少数民族のエリートたちを語る上でも、この視座の適応性は議論するに値すると思う。前者に関して言えば、非常に潜在力のあるアプローチだと思っている。

ここ五年ほど、ラサの急速な都市化やそれに伴う教育・メディア環境の充実化のため、西蔵班（校）出身者たちのよ

うな特徴を持つ、地元チベット人の若者が増えてきている。都市部―農牧地域間の格差や乖離 [Fischer 2005] が、社会経済的な領域だけでなく、チベット人の意識の面でも急速に広がってきているように思える。この、もうひとつの(ポスト)コロナアルともいえる現象は、まるで西蔵班(校)経験者たちの抱える民族的矛盾が、今では都市部―農牧地域の「空間の差異」に遷移し、具現化されてきているようにみえる。これまでエリート・チベット人たちに矛盾や葛藤を作り出してきた(ポスト)コロナアルの力のベクトルが、今までは次元の異なる方向を向き始めている、と言っているかもしれない。この点は、これまでに筆者が展開した議論と、それに対する多くの貴重な批判とを合わせて、稿を改めて考えたいと思う。

## 注

〈1〉本論考は、筆者の博士論文「National Imaginings, Ethnic Tourism and Contested Tibetan Identities in Contemporary Lhasa, Tibet (PRC)」[2006, SOAS, University of London]の一部を抜粋、改訂したものに、新しい情報・観点を追加したものである。

〈2〉「西蔵班」とは、中国内地の中高等教育機関内に設置された、チベット族向けのカリキュラム、教育制度、学級

のことを指す。また「西蔵校」とは、上海や北京などの大都市に新しく創設されたチベット族だけが通う中等教育機関を指す。中国・チベットでは、「西蔵班(校)」と表現されることが多い。本稿もそれに従う。

〈3〉本稿では、特に断りがない限り、「チベット」とはチベット自治区を指し、四川省・青海省内などに広がるチベット人居住地域は除外するものとする。

〈4〉「西蔵班(校)」成立の背景には、一九八〇年代前半に敢行された一連のチベット緩和政策のひとつ、漢民族幹部の自治区からの大量引き上げも深く影響していると思われる。

〈5〉二〇一〇年現在の段階で、一八の省や直轄都市の五三か所に西蔵班(校)養成施設が設置されている(『西蔵日報』二〇一〇年六月一九日)。

〈6〉具体的な数字は、内地西蔵班の学校校長の育成会議(二〇一〇年六月一八日)における、自治区副主席孟徳利の談話による(『西蔵日報』二〇一〇年六月一九日)。なお、政府レベルで公表される西蔵班(校)制度に参加する子供たちの人数は、現状を正確には反映していないと思われる。ここ一〇年ほどのラサの経済発展を反映して、裕福な家庭では政府の助成に頼らず私費で、個々の人間関係を利用して、選抜試験に不合格となった子供を中国内地に留学させる場合も少なくないのである。実態は定かではないが、地元ラサの関係者の話では相当数いるようである。

〈7〉西蔵班(校)参加者の中には、援蔵幹部の子女などの漢

民族や、その他の少数民族も含まれる。正確な統計は公表されていないが、二〇一〇年のラサ市から西蔵班(校)の試験に合格した生徒でいえば、三五七名のうち、四九名が漢民族であった(『拉薩晚報』二〇一〇年七月一五頁)。ラサ市以外のその他の地区では漢民族世帯が減るため、全体的にその割合はさらに小さいと思われる。

〈8〉 やや古い統計であるが、『西蔵統計年鑑 二〇〇七』(二二頁)によると、二〇〇六年における農牧業人口および非農牧業人口の比率はそれぞれ八三・六%、一六・四%となっている。ちなみに一九七八年ではそれぞれ八五・五%、一四・五%となっており三〇年近くその割合はほぼ同じである。

〈9〉 一方で、二〇〇七年には「西蔵班(校)廃止」の噂がラサで流れ、地元メディアでも注目されることとなった。ラサでは内地レベルの中等教育の設備が整いつつあること、それにともない、西蔵班(校)はその歴史的役目を終えたことなどが、政府レベルで認識されつつあると考えられる。関係者の話によると、更なる理由として、西蔵班(校)に参加させるために、親や学校側が小さな子供たちに与える過大なプレッシャーに対して、教育当局側が困惑しているという。西蔵班(校)制度の廃止の動きがあることは確かなようであるが、その背景は複数の要素からなっていると思われる。

〈10〉 ツェリン・オーセル(唯色)は、最も著名な現代チベット人作家の一人である。文革期のチベットを題材にし

たルポルタージュ(『殺却』など)を著した。二〇〇八年に起きたチベットの暴動では、オーセルのウェブサイト(<http://weesermiddle-way.net/>)が、現地の生の情報を流し続けていたため、関係者間で注目された。

〈11〉 無論、本稿で提示される論点も、筆者自身の「政治的な立場」からは自由にはなり得ないと言える。本文で挙げた研究者の政治性に対する批判は、同時に自己批判でもありうる。

〈12〉 詳細は拙論[2006]を参照。また、現在の中国・チベットをめぐる政治的状况を鑑みた上での倫理的配慮から、インフォーマントたちの鋭いコメントの多くは、本稿では割愛せざるを得なかった。非常に残念であるが、読者のご理解を請う。

〈13〉 また、次のようなエピソードも、ある関係者から聞いた。九〇年代後半にチベット人外国語ガイドを養成するため、自治区旅遊局が西蔵班(校)の中学卒業生を選抜して、ある省の専門学校に送ることになった。チベットでのガイドの仕事は肉体的にかなりの労力を要するため、旅遊局は男子生徒の大量育成を要請したが、漢民族生徒との暴力沙汰を懸念した学校側がこれを拒否し、結局、ガイド養成のため受け入れた生徒の九割近くは女子となったそうである。

〈14〉 「麦魚がし」のことで、大麦を炒りがし、ひいて粉にしたもの。チベット人の主食の一つである。

〈15〉 チベットでは魚を食することは、宗教的な理由もあつ

て疎まれる傾向にある。

〈16〉拙論「2009」でも紹介したが、複数の言語を同時に使って話す人間やその話しぶりを揶揄して、チベット語で「ラマルク」(ra ma lug)という。「ヤギでも羊でも、どちらでもない」といった意味であるが、「ヤギの鳴き声か羊のそれか」分らないくらい、異なる体系に属する言語の奇妙な組み合わせで、言葉にならない言葉を話す人間を指す。西藏班(校)出身者は間違いなく代表的な「ラマルク」である。もともこの傾向は、都市部に住むチベット人の多くに当てはまるが、「内地帰り」の若者はその傾向が一段層強い。

〈17〉筆者は旅行業に携わっているため、これまで多くのチベット人ガイドと接してきたが、彼らは往々にしてチベットの仏教文化や伝統に関しては、思いのほか造詣が深い。また「仏教徒である民族」としての誇りも、並々ならぬものがある。これは何よりも、チベット各地に外国人に同行して巡礼する機会に恵まれていること、そして仕事の中で、仏教徒としての経験と信仰を深めることができるという、社会的条件がそうさせていると思われる。

〈18〉彼は現在ロンドンに住み、創作活動を続けている。彼の画廊のウェブサイトは<http://www.sweetrahouse.co.uk/>

〈19〉人類学者 Harris はこの主張をする上で、美術史家パノフスキー (Panofsky) の提示した観点を紹介している。絵画において、描かれるモチーフの中身やその物語などよりも、「図像の測定様式」(iconometric code)の中に、ある

特定の文化の美的感覚が表れ出る、というものである。現代チベット人画家ゴンカル・ギャツォが創出したスタイルは、中世ヨーロッパや古代エジプトの美術を研究したパノフスキーのこの観点に繋がるものであると、Harris は驚きとともに報告している [1999: 194-195]。

〈20〉例えば Williams and Chrisman [1994] に掲載された、多くの重要なポストコロニアル批評の論文を参照。

〈21〉本稿の主題である西藏班(校)出身者たちとの関連でいえば、亡命コミュニティの間で、ヒマラヤを越えて新しく亡命してきたチベット人たちや、中国在住のチベット人に対する差別めいた発言が散見される。前者の人々はチベット語で「サルジョル」と呼ばれるが、この呼称には、中国文化に慣れ親しんできたチベット人に対する差別的なニュアンスが含まれている。筆者が亡命政府の拠点ダラムサラに滞在していた時期(二〇〇〇年二月〜八月)には、「自尊心の欠けている」、「慈悲の心が少ない」などのネガティブな視線がこのサルジョルに対して投げかけられていた。「漢化」されたため、「チベットの伝統文化」や「平和的な振る舞い」、「慈悲深い生き方」などが消えつつあると、政治的な意図があったとはいえず、ダライ・ラマでさえ中国領で育ったチベット人に対して苦言を呈したこともある [International Commission of Jurists 1997: 353]。

参考文献

〈日本語・中国語〉

村上大輔 2009 「ラサにおける民族内格差とチベット人アイデンティティの行方」『中国21』Vol.30 特集 公正と救済、一七五—一九二頁、風媒社。

毛里和子 1998 『周縁からの中国——民族問題と国家』東京大学出版会。

郭龍岩 2008 「内地西藏班(校)藏族学生跨文化社会化实证分析」『西藏研究』二〇〇八年第五期、一〇〇—一一頁。  
西藏自治区統計局・国家統計局西藏調查總隊編 2007 『西藏統計年鑑二〇〇七』北京：中国統計出版社。

〈英語〉

Bauman, Zygmunt 1996 “From Pilgrim to Tourist: Or a Short History of Identity.” *Questions of Cultural Identity* (Stuart Hall and Paul du Gay eds.), Sage Publications.

Bhabha, Homi 1994a *The Location of Culture*. Routledge.

Bhabha, Homi 1994b “Remembering Fanon: Self, Psyche and the Colonial Condition.” *Colonial Discourse and Post-colonial Theory: A Reader* (Patrick Williams and Laura Chrisman eds.), 112–123, Pearson Education Limited.

Fanon, Frantz 1986 *Black Skin, White Masks*. Pluto Press.

Fischer, Andrew 2005 *State Growth and Social Exclusion in Tibet*. NIAS Press.

Harrell, Stevan 1995 “Introduction: Civilizing Projects and the

Reaction to Them.” *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers* (Stevan Harrell ed.), Seattle: University of Washington Press.

Harris, Clare 1999 *In the Image of Tibet: Tibetan Painting after 1959*. Reaktion Books.

International Commission of Jurists 1997 *Tibet: Human Rights and the Rule of Law*. International Commission of Jurists.

Lafitte, Gabriel 2003 “Development, Dependence, Periphery and Accumulation: Aspects of Tibetan and Chinese Economic Thought and Practice,” presented in 10th IATIS Oxford.

Murakami, Daisuke 2006 “National Imaginings, Ethnic Tourism and Contested Tibetan Identities in Contemporary Lhasa, Tibet (PRC).” Ph.D. thesis, School of Oriental and African Studies, University of London.

Shakya, Tsering 2008 “Tibetan Questions (interview).” *New Left Review* 51, May–June 2008.

Spiwak, Gayatri Chakravorty 1990 *The Post-Colonial Critic: Interviews, Strategies, Dialogues—Gayatri Chakravorty Spiwak* (Sarah Harasym ed.), Routledge.

Spiwak, Gayatri Chakravorty 1996 “Bonding in Difference: Interview with Alfred Artaga.” *The Spiwak Reader* (Donna Landry and Gerald Maclean eds.), 15–28, Routledge.

TIN [Tibet Information Network] 1998–2002 *News Review: Reports of Tibet (1997, 1998, 1999, 2000, 2001)*.

Wang, Chengzhi and Zhou Qunhou 2003 “Minority

- Education in China: From State's Preferential Policies to Dislocated Tibetan Schools." *Educational Studies* Vol. 29, No. 1.
- Wang, Lixiong (王子雄) 2002 "Reflections on Tibet." *New Left Review* 14, Mar.-Apr. 2002.
- Williams, Patrick and Laura Chrisman eds. 1994 *Colonial Discourse and Post-colonial Theory A Reader*. Pearson Education Limited.
- Zhu, Zhiyong (朱志勇) 2007 *State Schooling and Ethnic Identity: The Politics of Tibetan Neidi Secondary School in China*. Lexington Books.